

# 雲根志

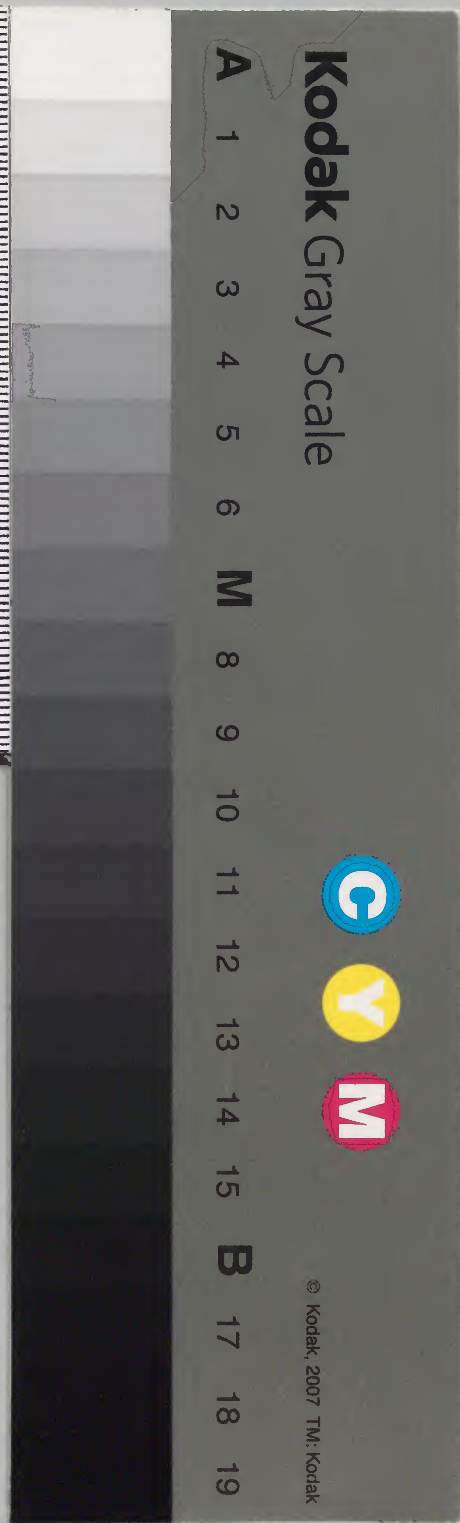
後編

二

内閣文庫			
一九七函	一六册	二七〇二號	和書類

大政官文庫			
一六册	一八函	二七〇二號	和書門

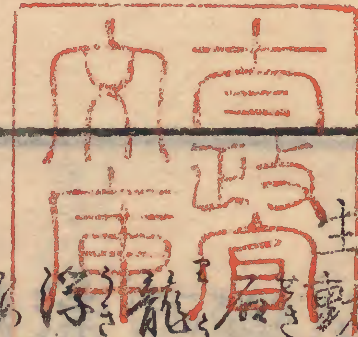
内閣文庫	
番號	和 11702
冊數	16 ( 8 )
函號	197 97





雲根志後編卷之二目錄

生動類二十九種



龍石 牡丹 浮石 龜石 生魚石 獅子石 花石 小女石 露石

九 十 十一 十二 十三 十四 十五 十六

神鏡石 震石 取石 出石 龍生石 河寸石 龍馬石 石魚 項衛地蔵

十七 十八 十九 二十 二十一 二十二 二十三 二十四 二十五 二十六

雲根志後編卷之二

目



生蛇石 十九

怪石 廿一

首斬地石 廿二

蛇石 廿五

踏石 廿七

辨慶石 廿九

崇石 卅一

西石 卅二

仙閣石 卅五

石実 卅七

露涌石 卅九

龍神石 卅三

一指石 卅二

朝倉景石塔 卅四

管砂 卅六

飛石 卅八

鈴石 卅九

首切佛 卅二

仙簾珠 卅四

石闘 卅六

孕石 卅八

目錄終

雲根志後編卷之二

江州山田浦本内小繁重曉著述

生動類 二十九種

石牡丹 一

享保三年四月伊豫玉福祇尾村雲辺寺山此跡又石

花を生きてそら此状山茶花此花紅なり紫い牡丹

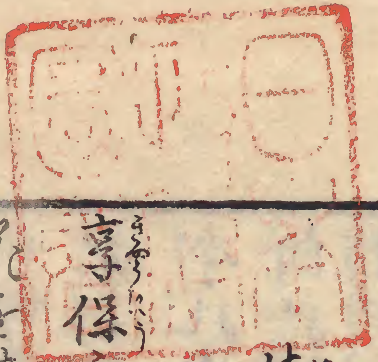
丹に似たり又花法翻葉は之國海道浦津村此海道

敷百枚石毎又花を生きて玉替花此花間牡丹

似るあり色い紅なりと其福を口を里より見物

此人類をたると予け一石をゆり牡丹に似る玉

簪花に似る色紫花祇尾方面之面又海中此産





石牡丹石菊石紫冠花等あり別條よ出を飛騨に  
馬山よ玉より牡丹花を成さりのあり澤六より石  
花をけしとる事 柳柳代碑篇及名山志等より  
記す

神絆石 二

神絆石といふその筑後之田原之徳助大石村に産  
出神の絆絆石之むりけ石より一握許ありけ  
年々又増長せり仍て毎年神社を大に建替り事之  
今此神社之四方神絆石の敷十人を一て持べしけ  
所此結護神とて所れ人安産此祈願をなすと云  
瑞少くとと西陽雜俎曰有漁子下網舉之有一石  
如拳石遂長不已經年重四十斤

龍石 二

武藏国金澤一寺の住僧石を巻とる癖あり或日  
大石を巻とる所此石を破きとる電養物とて  
そ破れ破きより龍あらはせと云ふと云ふと云ふ  
を江中門此石中よ持とる一石を指し石より  
一湯水出せと衆回物と云ふ水乃石より事なり  
思ふ實て石水よ供とる事五十年所此思ふは大僧  
正に任しぬ武時彼石二つ破き居間此石并を破  
て龍と伝へく上云ふ今よ彼破石跡て是を云ふ  
又石中少豆粒れ大に許なる空罅あり又日石中  
臥東門院此寺下門院此僧茶をぬり或時茶臼







由まれば氣搖るるから大勢力を用てこれと氣せば  
とらへも氣を又去依は情多初碇此岬又一石あり方  
去尺三寸の石なりきより去尺許れ去面たる石あり下  
なる大石を指しゆくもさる大石の氣をうて上なる石  
動くくしくもそれいよく動て休を後よ大石を離  
きて花揚るるけし不そを震石といふ又淡路玉子  
山より日物れ石あり里人氣止石といふ

浮列石 五

瀨原玉里島此内庭戸の海中に大石あり此れ淺干に五  
七尺で島下あれし石法上より出る半つりそよ一尺許  
りして船毎よりる氣を是よりと或いたる堅或いは石或いは

又い法等よりありてそよ一なりと又山城宮宇津三  
等院の麓なる川中より五重に塔あり清水といふ水も志  
とらへく石塔れ水上より出るそよ一なりと又山城宮宇津三  
清水といふ石塔いづくの流き美て今いなり或は宇津  
とらへ寺院よりありしをいなり

取上石 六

出羽玉里田北北男麻島凡五六里と海中へ出る石と  
窪田より陸地十余里船路に五里之なる新山の間に男  
麻島村といふ湊ありけし此蘇海涯に大石ありそ石より  
一石よりありてあり風波を帯りて上なる石を波よて  
うちおとすと小程なく初れと自然と帯り上るい川乃



以<sup>り</sup>も<sup>り</sup>け<sup>い</sup>石<sup>を</sup>二<sup>三</sup>町<sup>脇</sup>へ<sup>折</sup>り<sup>一</sup>並<sup>一</sup>と<sup>又</sup>彼<sup>大</sup>石<sup>の</sup>  
上<sup>と</sup>ま<sup>り</sup>と<sup>ま</sup>う<sup>と</sup>さ<sup>れ</sup>事<sup>と</sup>あ<sup>ら</sup>む<sup>や</sup>今<sup>程</sup>か<sup>の</sup>こ<sup>と</sup>  
里<sup>人</sup>の<sup>言</sup>と<sup>け</sup>此<sup>れ</sup>風<sup>波</sup>の<sup>よ</sup>ら<sup>と</sup>妙<sup>事</sup>と<sup>や</sup>又<sup>上</sup>石<sup>れ</sup>為<sup>り</sup>  
と<sup>り</sup>と<sup>今</sup>も<sup>信</sup>と<sup>と</sup>と<sup>や</sup>

亀石

山<sup>城</sup>山<sup>宇</sup>治<sup>平</sup>等<sup>院</sup>の<sup>川</sup>向<sup>い</sup>水<sup>の</sup>涯<sup>に</sup>龜<sup>石</sup>あり<sup>と</sup>又<sup>又</sup>  
又<sup>許</sup>首<sup>の</sup>方<sup>が</sup>一<sup>と</sup>り<sup>て</sup>尾<sup>れ</sup>方<sup>の</sup>流<sup>水</sup>の中<sup>に</sup>あり<sup>傳</sup>と<sup>云</sup>  
い<sup>う</sup>なる<sup>事</sup>水<sup>の</sup>け<sup>い</sup>石<sup>流</sup>ま<sup>と</sup>又<sup>于</sup>水<sup>の</sup>も<sup>あ</sup>ら<sup>む</sup>と<sup>あ</sup>  
上<sup>と</sup>ま<sup>り</sup>事<sup>い</sup>つ<sup>も</sup>も<sup>何</sup>と<sup>又</sup>或<sup>人</sup>云<sup>を</sup>江<sup>玉</sup>大<sup>は</sup>は<sup>に</sup>  
舟<sup>寺</sup>より<sup>坂</sup>本<sup>山</sup>門<sup>の</sup>あり<sup>細</sup>道<sup>山</sup>端<sup>の</sup>龜<sup>石</sup>橋<sup>と</sup>い<sup>ふ</sup>  
あり<sup>と</sup>江<sup>玉</sup>大<sup>は</sup>は<sup>に</sup>龜<sup>石</sup>れ<sup>大</sup>と<sup>人</sup>許<sup>け</sup>龜<sup>石</sup>の<sup>事</sup>

又<sup>又</sup>事<sup>あり</sup>け<sup>遠</sup>北<sup>俗</sup>從<sup>と</sup>湖<sup>水</sup>ま<sup>が</sup>ら<sup>な</sup>れ<sup>バ</sup>湖<sup>中</sup>  
中<sup>に</sup>遊<sup>び</sup>又<sup>あ</sup>ら<sup>む</sup>時<sup>に</sup>又<sup>傳</sup>り<sup>て</sup>橋<sup>と</sup>成<sup>と</sup>ま<sup>ら</sup>む<sup>や</sup>  
石<sup>を</sup>ま<sup>と</sup>と<sup>常</sup>と<sup>い</sup>龜<sup>石</sup>橋<sup>を</sup>ま<sup>ら</sup>む<sup>と</sup>又<sup>と</sup>も<sup>橋</sup>な<sup>ら</sup>  
く<sup>も</sup>又<sup>ら</sup>ま<sup>り</sup>も<sup>な</sup>ら<sup>ぬ</sup>道<sup>なり</sup>怪<sup>石</sup>供<sup>又</sup>龜<sup>石</sup>あり<sup>と</sup>  
夏<sup>の</sup>海<sup>に</sup>入<sup>る</sup>い<sup>と</sup>山<sup>上</sup>と<sup>止</sup>ると<sup>記</sup>せ<sup>ら</sup>れ<sup>し</sup>歎<sup>なり</sup>ん<sup>ら</sup>

出石

近<sup>江</sup>山<sup>國</sup>寺<sup>村</sup>の<sup>草</sup>津<sup>北</sup>路<sup>より</sup>東<sup>二</sup>里<sup>許</sup>北<sup>山</sup>中<sup>に</sup>  
て<sup>村</sup>敷<sup>多</sup>し<sup>と</sup>又<sup>慶</sup>應<sup>六</sup>年<sup>九</sup>月<sup>十</sup>二<sup>日</sup>北<sup>東</sup>村<sup>近</sup>  
に<sup>五</sup>里<sup>程</sup>程<sup>に</sup>龜<sup>石</sup>大<sup>なる</sup>車<sup>軸</sup>を<sup>流</sup>す<sup>と</sup>山<sup>家</sup>を  
て<sup>大</sup>洪水<sup>浸</sup>きて<sup>山</sup>國<sup>寺</sup>村<sup>に</sup>家<sup>敷</sup>は<sup>五</sup>十<sup>戸</sup>流<sup>失</sup>て<sup>死</sup>  
に<sup>る</sup>もの<sup>と</sup>十<sup>余</sup>人<sup>を</sup>江<sup>乃</sup>家<sup>を</sup>流<sup>し</sup>人<sup>を</sup>救<sup>む</sup>事<sup>あり</sup>

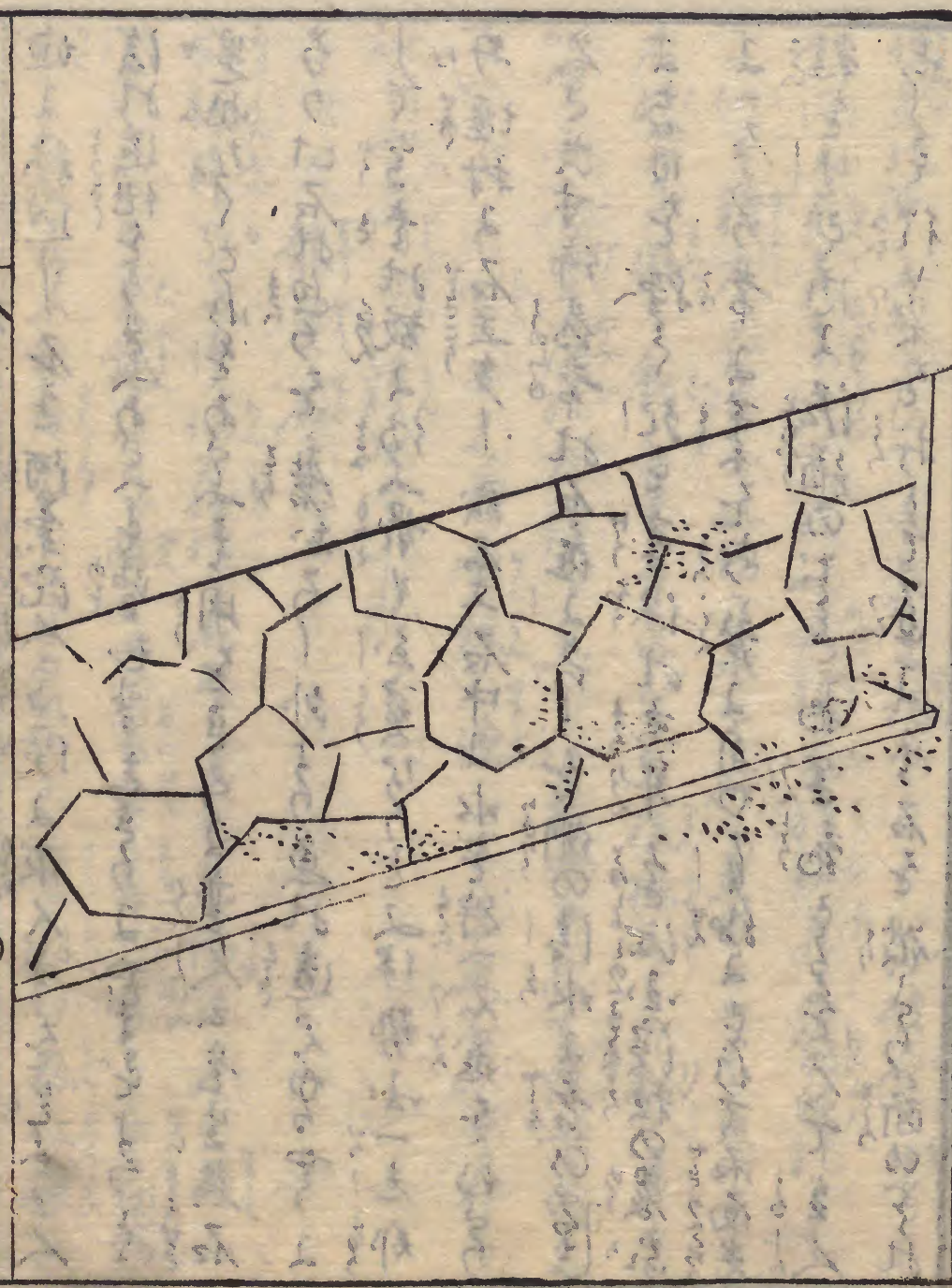


今より三つぐね 藤井の麓 一帯 大に怖るげ 坂東坂村  
 此中へつづりてともまゝ 坂方には 阿波 面許なる 大石出あり  
 て 村の 中へ 止る 魚 野人 力に 及ぶ 不 及 あり とも 俗出  
 石と 名く 近年 村家 造作 此 為 許 あり 今 此  
 或人 けり 石 出る 山 上より 通 入り 来 ば なる  
 高 山の 頂より 山 裂て かの 大石 を 吹 出 せ たり 牛馬  
 此 かけり たり 遠 敷 あり けり 村 中 へ 止る とい 教 の 事  
 宋史 及 五 杉 志 へ 記 あり  
 生 魚 石 九  
 近江 大津 の 町 北 杉 葺 屋 根 へ 置る 石 へ 時 時 乃  
 ありて 嘔 吐 一石 あり して 心 を ちりて 是 を 見る べし

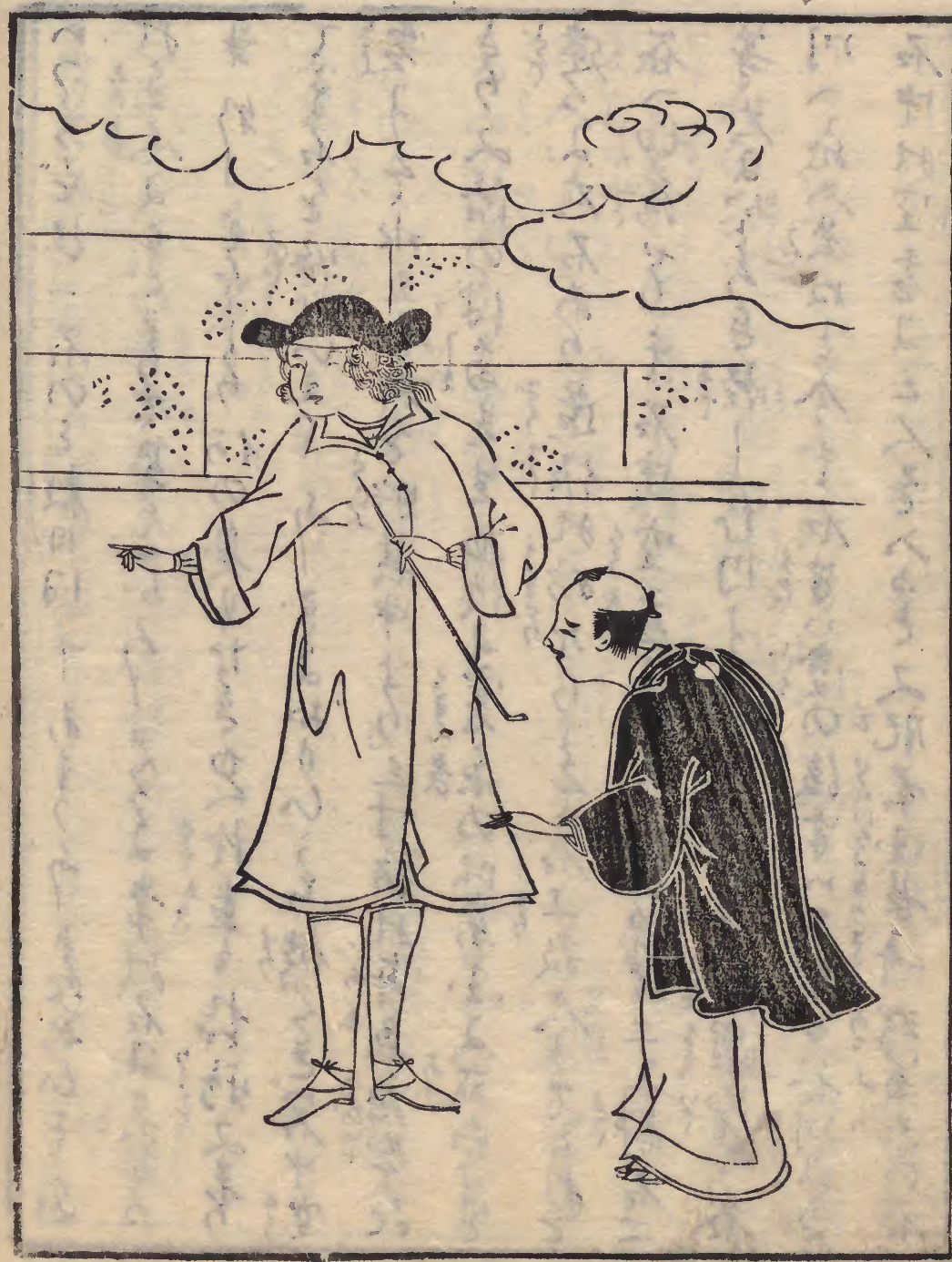
いつらと 一石 の と 教 曰 けり あり けり けり けり けり けり  
 此 主人 こと ありて 是 を ちり けり けり けり けり けり けり  
 半 舟 一 舟 あり けり 舟 の 奥 へ けり けり けり けり けり けり  
 て 石 を 嘔 吐 けり けり けり けり けり けり けり けり けり  
 ありて 水 五 合 許 を 貯 其中 けり けり けり けり けり けり  
 けり 又 洛 の けり 先生 物 後 けり けり けり けり けり けり  
 建る 大石 あり 造 作 此 妨 けり けり けり けり けり けり  
 谷 へ 切 落 せり 石 中 空 ありて 水 出る 半 二 三 斛 石 工  
 等 大 けり けり けり けり けり けり けり けり けり けり  
 川 へ 飛 入 ぬ 今 石 けり けり けり けり けり けり けり けり  
 石 中 けり 空 あり けり けり けり けり けり けり けり けり けり



高麗書院



高麗書院



高麗書院











此一山と何乃比なるやい岩角を切落し平地となせし  
又夜に石生し響く之内より下れたるなりぬき  
塩菜田切れてもたふたれとく人の丸牙を生かす

飛動石 十三

予幼年松尾は有馬と遊て薩摩の松人と一月許日宿  
せり彼松人云薩摩とて奥山といふ五十里と百里とあり  
六十里嶋といふ小舟にゆりて一ヶ月松木を切り又行事とて奥  
山なる人なり一夜小屋を置せりは怪異此事を聞てなり式時  
登十人許木を切り居る悪気此時多しとく本陰と休  
息しぬ側と二人持許なる後よりして是き石あり一人

の北へ山石は腰植て勢は休む後より木を立ふ人  
是る時伴の石二つは裂破て牛此處よりく大車を牽  
したるをす流りたるのくくはわくとおと投りし  
第一く山二つ載てむくく谷へ流る傍の人たは勢  
衰して暫時い相りよりのもなるなりと大膽なるをこ  
二人彼處より氣を引かれもるる

龍馬石 十四

或人云肥前國一ぬ士あり一石を産と掌れ人より  
て白く透る水晶似て分明石中一おわり時  
氣くく帯し机より懸るふくく石の石不自然  
よるよりくくはたく是はたし移るる是はは机より







近江小碓多川の隈琵琶湖に流る石山寺より一里許  
川下二園の付村とありけり石のぶら上り大日山之西  
岸に懸石とあり首尾二丈余背の水より二尺許  
出脈の水中より湧く首を少く挙げ実より懸の流水を  
よるふ似たりけり此里浴衣傳ふ湖水時々水より下  
りて石水中よりわたりて争りてくもほりや  
志るる石吾を志るる

露生石 十七

近江小碓大けの沢松本此寺聖大明神に松本村此氏神なり  
神職和田系乃相傳ふ十余年と云  
櫻河院河在位の時時涸れ梅此宮の神職系より奇石

をなすも状を石に保まへくは五寸許の石なるが自然  
に山嶽乃景ありて絶頂より雲を生じて  
て拭へいふく生と  
敷煖ましくを伝ふとるの奇怪の  
おもふ 沙流をくもりのあはれとてくをくれ今  
櫻梅の宮に珍石と

項衝地 十八

寶曆元年秋九月子大坂より返るる事ありて此寺  
に石地をなすなり 此言を大坂中の人をなす  
予も寺を尋てそれをみるに長五尺許なる石  
乃石地をよて新造のまのくりとなりてなり



も一や首龍の子細わんうと後よまきりて乞を求む  
 う一とら幸もなげうと糸流の老るわやううと足と  
 あむと地形一仍て 官一り乞を禁制一りてそ  
 うご即やねとててるうれあ中一と半をなごへ奴信の  
 悪ま悪婦を歎く詔言なりそ悪ま悪婦れあむ  
 ううのうとあう候士老子と乞とも乞よまきり半  
 を好事ふれ興うう半なれも因よを御感を各  
 と怪むべき事なり  
 生蛇石 十二  
 明和二年戊辰四月十五日糸流 東と三造物云よ一奇すと  
 乞と大と巻れとく悪色ううて因浦く一と金く一と

所石なりを破る石此中よ柳ふれ大と許なる空を  
 あり抄まよ云是生蛇石とい空をなるあうり小蛇出り  
 け金き石中よ又蛇りと産け江州彦根と云と  
 龍神石 二十  
 近江小上郡蟹原尾北池い人の知るる石龍なり古俗  
 傳くとい池よまうう一奇怪の事とあり 龍臺の側  
 よ一木と面なり大石ありあいに事なりううと伝ふよ  
 龍神の巻一り石を龍神ると云く享保年中の  
 比けと池の村一女性髪れおらるを置よまきりぬ一村へ  
 入去人未事一むか問く或人為髪を穿よまきりかく  
 志をりなるを問ふ彼もの云け髪を穿よまきり尾の龍の龍



津石勢田此龍神一軒をよらて彼石を擔入繩に依りて  
其後伴の石の方一石もやらん失ぬりしより人力を以  
て運搬しきと石よりあつてと何不東寺堂村備島氏  
此石強かり

怪石 世

近江玉櫛村櫛素村設よけ村の奇怪の石山石を不持  
ぢり人あり方七八寸より五寸許なるがり石は丘を渡  
洞の趣を作せり最又清涼之志ありけし石は葉を  
是より足まきと奇と云ふく人々の物と云ふ不  
明日の林と云ふく谷と云ふく丘と云ふくと云ふや  
石を志しと

一指石 世

近江玉櫛村は設より東へ三里山の上玉櫛寺といふ  
あり即此の金勝山といふ高寺二王門の南よりより  
一町許南の間の平地に六七尺の面なる石ありそ  
南西の方より指一本をもちこれ即ち久しくも  
されば次第の如事なり又教人をりてをもちを  
きい一向を揺せむ仍て一指石といふ 安永二年己  
五月廿六日高山上に登り親に是を試み実玉奇石と  
事文類集よせり 嚴州府の一指石を云ふ高山上に  
此石あり所謂一指石園と石人肌石を云ふ續編は  
旅し是を毎せん



首斬地蔵 廿三

系部五條貞別山甚志寺境内地蔵堂此縁起を  
竹田乃里又竹田次郎直善といふものあり  
此地地蔵を念じて百日れ系詣をつむ或日故障  
ありて表へ入て系詣をよみ登城道を遮る直善  
乞ふ誠之を欺く時を移る傍より伊賀坊を  
ありや呼て大の法師出てかの城と掘て首を  
斬て系詣をかをりしは是剛なる縁の急化なりと世  
忌てこそを称致し首斬地蔵と号をとりしは昔  
純て地ハ氏の栖となるしを中興玉巻上人これを  
げして再興し今石像を安んず

朝倉義景石塔 廿四

越前北条江村の東一条れ谷又朝倉義景の五輪といふ  
ありはまの里人傳つは五輪毎年十月初日卯の上刻自  
然と氣き出でて卯の時刻よむて一丈許空中へ飛上  
又飛れしとて落て止まりむりより今もむりからの  
こしとを説怪むべしとてを述これ人乃  
實説といふは

蛇石 廿五

尾張尾張守あり氷室系氏好事れ人して奇石を  
事ありて多し明和八年卯五月八日予がを方きて  
三日之夜石此事を傳と見珍物の玉石教籍を畏



来て見せし中ニ地石と云ふもの最奇なり其形  
うろく色白く尋常此砂石にて大と堅粒の  
似此堅き者も小石なり是を火中ニ投じり  
又細く長く割れ肉もたさ等爰れくもさ  
許より取らば取り取り取て之を  
常陸王笠岡の庄にて里人地石と云ふ  
と云

螢砂

伴勢王治田山ニ螢砂と云ふものあり色所白く常時  
此粒砂を大なる巨粒の  
一見をきい又は怪異なるものありと云ふ  
と云

試み味となく香氣もなし但火中ニ投じり青く  
粒を揚るとも白雲の粒は是なる事なり予を  
合許をゆりしる奇品なり里俗螢砂と云

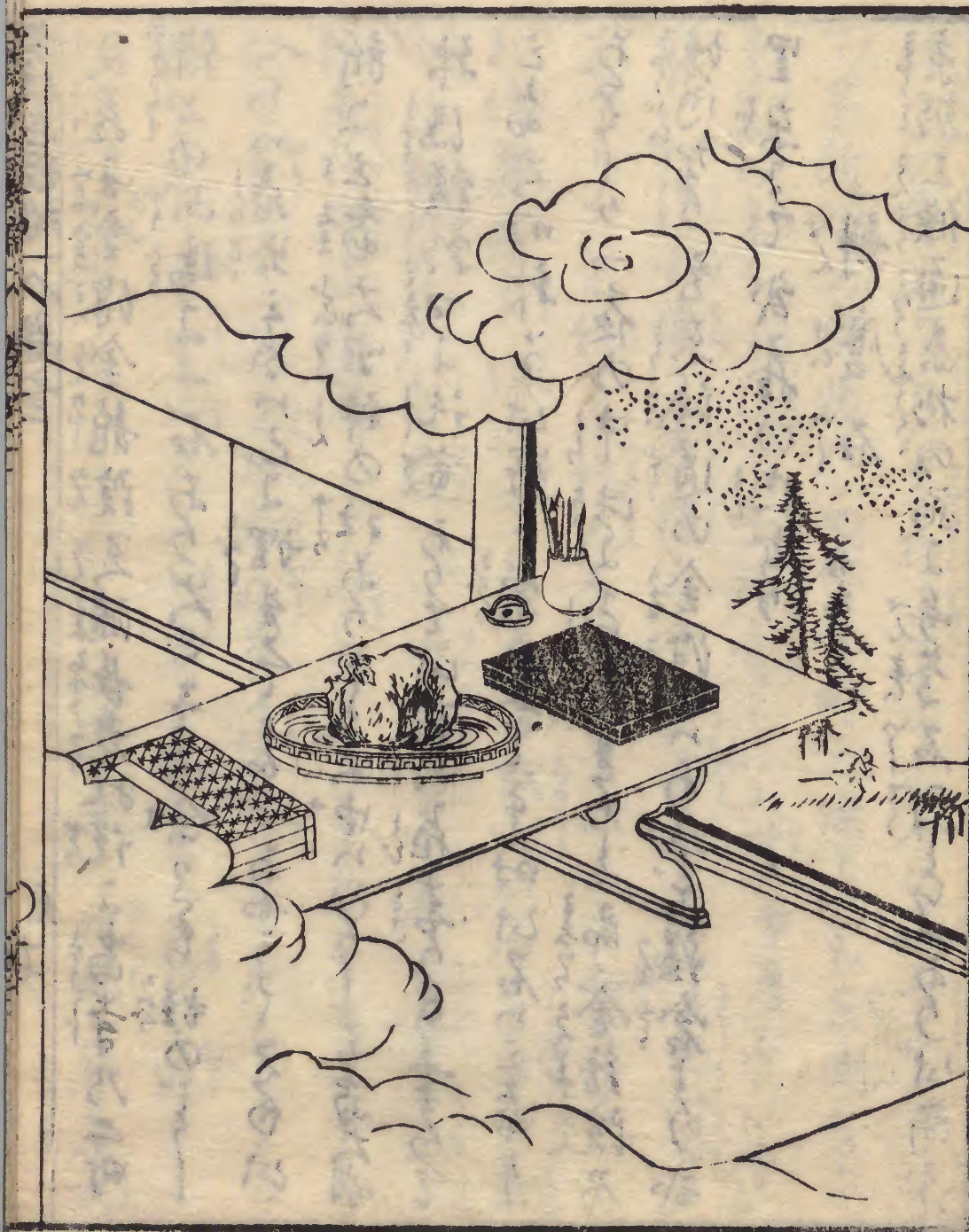
蹴石

神書ニ我々桑野中又大なる石ありを祈て  
おこましく履今古地味を滅さん事を祈り石と蹴  
んは柏の葉れり揚てとのこまいて蹴り  
大石中又花揚ぬとりや  
乃や仙傳指邊又系法善符を投されり巨石須臾  
又花をきりと祀せり

飛石

飛石 廿八





雲梯後編 卷之三







ほよの幼少よりてい之條系極寺より位ときとい石の志  
とい来る事ありや正從いも福なきを彼寺ほ  
北をよ地へ移を石の程旧地よ送りよるて今町号と  
と又を後彼石を抄多致ち方丈の庭よ移せりとも  
いり又曰名りては從の石五條寺町極楽寺中よ  
とあり又武神河乃側よありつがきりをなやあひ  
りかり

鈴石 三

武義王東海通船品川口の近辺に森一石あり他石  
を以て是をよけり判亮とて鈴の音ありあひよは石  
よよりて鈴が森の名ありや志多りとも又美濃に片

己よりあり鈴石此寺系編に記をよるてはよ教を

崇石 世一

系於双林寺の境内に山の隅祇園女佛の宮に女佛田  
とて地ありそ教の外方の側よ一石あり知り人拂之  
を所謂崇石とすとのりては双林寺此わりの男も  
彼石を取来り寺内の山亭に置ぬる夜彼僕儀よ大  
熱を致し儀行と翌日僕が杖に彼石あり大に  
と掃くて元の石へ返すとよるり快復しとらと紙  
園女佛此寺の盛衰記よあり一處をよるり  
荊州記よ臨駕憑乘縣此寺よ崇石ありと今と同日  
此記なり事長けきいと略と



首切佛 卅二

相模小大磯の町端に石地蔵ありお供は地蔵を  
 入て娘をたり旅をとおもやると事志むりあり  
 一或夜豪傑のをもと潜りてを怪をうかひて危  
 を切きりと今よ石佛の首筋は刀藏送りを怪  
 異れ事なりととぶくい事の事多くと多くを供一  
 編よ出せり今按るよ周二奠茶一石よ怪を化と  
 一旧微志よ載り今の類は似たり

雨石 卅三

寶永年中富士より砂石を降し新に寶永に出  
 ありて今世の人乃知るべし東鑑曰寛喜二年庚

月八日大僧都觀基御所より一を申て去月十六  
 日夜半に陸奥國芝田郡に石雨れり降彼石一  
 將軍家よりまつる大さ柚の細長一廉石乃  
 り事二十余里と云後日本後紀より光仁天皇の  
 御宇寶龜七年丙辰九月二十日石降事あるの  
 又之代實錄曰觀十六年七月太宰府より言  
 去之月四日の夜雲建をを告して通音を展  
 運明又氣縁縁とて暗夜の時に砂石を降ら  
 ざる色黒く終日やま地は小石を降積事を厚  
 さふす或は之を昏暮よ及し一なるなる五雜俎曰萬  
 曆壬子十二月廿五日四川順慶府安州雨石大重十七斤



小十餘兩

仙簾珠

世四

本朝文粹曰承和年中富士山峰より落来る珠玉  
よ山に穴あり蓋是仙簾也昔者珠なりと云頂上  
より平地あり度一許里を中央に窪きあり體炊飢  
似たり甌乃底に神地あり地中へ大石ありを  
くぐり奇きと云一穴を踏虎れと云又甌中  
きよもるありて蒸出さる色純青を甌の底を  
ハ湯の沸騰がごとく

仙閣石

世五

三代実徳より貞観十一年六月駿河守藤原正家  
の峯小忽熾火ありて巖谷を焼禱く使者を

是を檢察せしむれは割海を埋む事十所許仰て  
正中に最頂に社壇忽然とて顯き遠く垣田隅あり  
丹者乃石をとりて其四面に立石れ言さ一丈八尺許中  
よ一層れ高岡あり石を以て楯管と彩色は藤わ  
げりよべりごとしり一河と云かんのごとくすあり  
と荊州記に馮乘縣とよはの丈ふよはトありしとの  
事を出戦しり

石闘

世六

尾加津の氷室氏伝に山中に紫を刈る日己の村  
へあそびしり帰て奇異の事とそあそびしり



四人を付し彼らよりくをえりて山間廣き谷の  
石川に数町の石れ中より大に斗れりて  
カチカチと響ありて時々火を焚く  
此れ打合まがごとく時許りてやねあ石もよ  
ち候よそを不ありをとりて何れ是なる事  
なりき之四人乃若と氷室にまかり馬氏日  
抄曰武清縣民家石臼與鄰輾軸跳躍相闘と和漢  
お似る況なり

石實 廿七

石實ハ奥加仙臺志のふまきとりて先年勢州津谷  
川氏をれを取寄せりて一見せりて取夢のほり

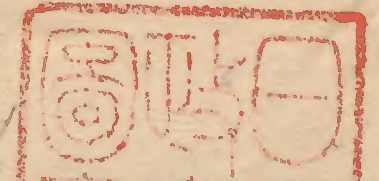
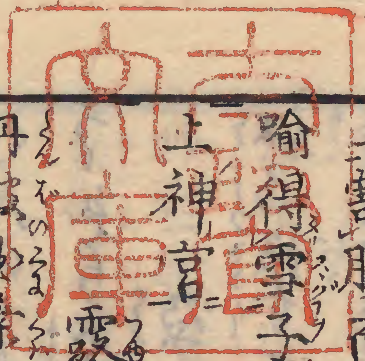
て蔓もあへん系極れり葉の根力小葉なるよ  
とりたの政とるゆりもの敷多あり梅れ花の敷  
れ産のこりそ中よ大と麻の突のこり石一粒  
つるり全く石なり

孕石 廿八

江加坂本蕉石亭説は河波玉産の人交野系嘗て坂  
本に産せり事ありけ人云佐将を十七歳の娘おは  
て懐妊せり而胎大よせめあねとて交りて是なりと月  
日言りて紙袋のこりものを産てを破て中を  
えりよ大と美のこり白色の石あり  
美なりと享保年中此事りくかの交野氏親りて



とむしりもかろのどきすあり本朝通紀云雄略天皇  
 三年己亥四月榜幡皇女腹中有病如<sub>ハ</sub>於是阿閉  
 臣國見<sub>レ</sub>譖<sub>レ</sub>曰武彦汗皇女故有<sub>レ</sub>妊身武彦之<sub>レ</sub>父根菅  
 喻聞<sub>レ</sub>流言恐禍及身殺<sub>レ</sub>武彦皇女亦經<sub>レ</sub>死於五十川  
 上割腹而觀<sub>レ</sub>之腹中有物如水其中有石由是根菅  
 喻得<sub>レ</sub>雲子罪而悔殺<sub>レ</sub>武彦欲報<sub>レ</sub>國見國見恐逃<sub>レ</sub>匿石  
 上神宮<sub>ニ</sub>露<sub>レ</sub>涌<sub>レ</sub>石<sub>一</sub> 卅九  
 丹波<sub>ノ</sub>津葉田<sub>ノ</sub>於智井庄依<sub>レ</sub>里村最勝寺<sub>ノ</sub>活<sub>レ</sub>五十年  
 年<sub>ニ</sub>兼<sub>レ</sub>祖父<sub>ノ</sub>在世<sub>ノ</sub>の時<sub>ニ</sub>高村<sub>ノ</sub>高寺<sub>ノ</sub>且<sub>レ</sub>那<sub>ノ</sub>の百姓<sub>ノ</sub>兼<sub>レ</sub>山<sub>ノ</sub>知<sub>レ</sub>の  
 土中<sub>ニ</sub>一<sub>ノ</sub>石<sub>ノ</sub>を<sub>レ</sub>移<sub>レ</sub>ひ<sub>レ</sub>来<sub>レ</sub>り<sub>レ</sub>石<sub>ノ</sub>を<sub>レ</sub>五<sub>ノ</sub>寸<sub>ノ</sub>を<sub>レ</sub>さ<sub>レ</sub>一



掘り色青黄より未<sub>レ</sub>細<sub>レ</sub>根<sub>ノ</sub>の方<sub>ノ</sub>を<sub>レ</sub>一<sub>ノ</sub>石<sub>ノ</sub>の<sub>レ</sub>以<sub>レ</sub>  
 より<sub>レ</sub>石<sub>ノ</sub>の<sub>レ</sub>湧<sub>レ</sub>事<sub>ノ</sub>日<sub>ニ</sub>は<sub>レ</sub>教<sub>レ</sub>流<sub>レ</sub>ボ<sub>レ</sub>タ<sub>レ</sub>リ<sub>ノ</sub>と<sub>レ</sub>傳<sub>レ</sub>て<sub>レ</sub>己<sub>ノ</sub>十  
 日<sub>ニ</sub>余<sub>ノ</sub>と<sub>レ</sub>や<sub>レ</sub>す<sub>レ</sub>と<sub>レ</sub>抄<sub>レ</sub>其<sub>ノ</sub>系<sub>ノ</sub>部<sub>ノ</sub>の<sub>レ</sub>高<sub>レ</sub>人<sub>ノ</sub>未<sub>レ</sub>合<sub>レ</sub>して<sub>レ</sub>を<sub>レ</sub>  
 金<sub>ノ</sub>五<sub>ノ</sub>あり<sub>レ</sub>と<sub>レ</sub>求<sub>レ</sub>て<sub>レ</sub>之<sub>ノ</sub>を<sub>レ</sub>ね<sub>レ</sub>今<sub>ニ</sub>も<sub>レ</sub>其<sub>ノ</sub>方<sub>ノ</sub>を<sub>レ</sub>去<sub>レ</sub>り<sub>レ</sub>と<sub>レ</sub>祖<sub>ノ</sub>父<sub>ノ</sub>は  
 石<sub>ノ</sub>を<sub>レ</sub>あ<sub>レ</sub>る<sub>レ</sub>日<sub>ニ</sub>新<sub>レ</sub>り<sub>レ</sub>ま<sub>レ</sub>る<sub>レ</sub>と<sub>レ</sub>輕<sub>レ</sub>り<sub>レ</sub>と<sub>レ</sub>惡<sub>レ</sub>果<sub>レ</sub>ある<sub>レ</sub>己  
 瘡<sub>ノ</sub>編<sub>レ</sub>曰<sub>レ</sub>魏<sub>ノ</sub>國<sub>ノ</sub>公<sub>ノ</sub>家<sub>ノ</sub>鴛<sub>ノ</sub>夾<sub>ノ</sub>石<sub>ノ</sub>水<sub>ノ</sub>自<sub>レ</sub>流<sub>レ</sub>出<sub>レ</sub>と<sub>レ</sub>は<sub>レ</sub>類<sub>ノ</sub>な<sub>レ</sub>と<sub>レ</sub>し

雲根志後編卷之二 終



